

心理学科新入生の10年間の変化

－関心領域・コンピュータに対する態度・希望する進路・職業知識－

水 野 り か

1 問題と目的

中部大学の心理学科は、2002年度に人文学部に新設された。新設直後は入学してくる学生が、1) どのような領域に関心があるのか、2) コンピュータに対する態度はどうか、3) 希望する進路は何なのか、4) どの程度の職業知識を持っているのか等が、全く不明であった。

そこで筆者は、これらの点を明らかにし、入学してくる学生の適性や希望に即した教育・指導を行いたいと考えた。そして、80以上の質問項目から成る心理学科アンケートを作成し、新設直後に実施して指導の指針とし、それをその後も10年間継続してきた¹⁾。

本論文は、10年間のデータを比較・検討し、新入生の特性の変化を明らかにすることを目的とした。

1.1 新入生の関心領域

心理学には、心の問題を扱う臨床心理学だけでなく、人間の情報処理過程を扱う認知心理学、学習過程を扱う学習心理学、発達過程を扱う発達心理学、社会的行動を扱う社会心理学、教育過程を扱う教育心理学、学校での行動を扱う学校心理学、人格の特性や形成過程を扱う人格心理学、障害者の問題や行動を扱う障害者心理学、膨大なデータの客観的比較・検定のための心理統計学等、実に様々な領域がある。

中部大学の心理学科はこうした様々な領域を満遍なく教育することを目指して作られた、私立大学ではめずらしい正統派の心理学科である。しかし、高校までは心理学を体系的に学ぶ機会がないため、高校生はもちろんのこと一般の人々の多くは臨床心理学しか知らない。特に、新設された2000年代前半はいわゆる臨床心理学ブームで私立大学の多くが臨床心理学に特化した心理学科を数多く新設していた時期だった。そのため、中部大学に入学してくる学生の関心が臨床心理学に大きく偏っていることが懸念された。

そこで、彼らの関心領域を明らかにし、偏りがある場合はこれを解消し、適切な導入教育を行う必要があると考えた。

1.2 コンピュータに対する態度

心理学は文系の学問である。しかし心理学は行動科学とも呼ばれる通り、実験、調査、面接、観察等で得られた人間行動に関する大量のデータを統計解析して客観的な知見を得るという極めて理系に近いパラダイムをとる。そしてこうした統計解析のためにはコンピュータが必須である。また、実験はコンピュータ制御で行うものがほとんどで制御プログラムの作成も必要となる。

しかし、文系を選び心理学を学ぼうと入学してくる学生たちは、こうした事実をほとんど知らない。そのため、新入生の多くがコンピュータにあまり興味がなく、嫌悪感すら抱き、その有用性を知らず、利用不安が高いことが懸念された。

そこで、新入生のコンピュータに対する態度を調査し、興味・関心の有無、嫌悪感や不安の高低、その有用性についての知識の程度を知り、食わず嫌いの偏見の解消に役立てたいと考えた。

1.3 希望する進路

中部大学の心理学科のカリキュラムは、卒業とともに認定心理士の資格が取得できるように作られている。認定心理士の資格は、先述した数多くの心理学領域の基本的な知識を満遍なく取得してはじめて得られるものであり、こうした知識は公務員試験、心理学検定、大学院の入学試験等に非常に役に立つ。また、中部大学は、中部地方に根付いた歴史ある大学で卒業生の多くは地元の中小企業に就職しており経営者となっている方も多い。心理学科の卒業生はこうした企業の産業カウンセラーになる基礎知識も有している。教員免許についても所定科目の単位を修得すれば中学校教諭一種免許状「社会」および高等学校教諭一種免許状「公民」を取得できるため、教職に就くことも可能である。

加えて、学部新設の2年後の2004年度には国際人間学研究科という新しい大学院に心理学専攻が設置され、博士前期課程と博士後期課程の教育体制が整った。博士前期課程では「学校心理士」認定運営機構に承認された科目の単位を修得すれば学校心理士の受験資格が得られる。また教職についても、高等学校教諭一種免許状「公民」を取得済みの者は修士の学位および『教

科または教職に関する科目』の必要単位を大学院で取得することで高等学校教諭専修免許状「公民」を取得することができる。中学校教諭一種免許状「社会」を取得済みの者は同様の方法で中学校教諭専修免許状「社会」を取得することができる。

このように、中部大学の心理学科および心理学専攻の卒業生・修了生には非常に多くの進路選択肢がある。そこで新入生がどのような進路を希望しているのかを明らかにし、希望に即した進路指導の指針としたいと考えた。

1.4 職業知識

希望する進路とは別に、その進路・職業について正確な知識を持っているか否かを明らかにする必要がある。なぜなら正しい知識を持っていないければ適切な進路を希望しているとは限らないからである。また、2000年代前半は、臨床ブームに乗じてマスコミ等で必ずしも正確でない情報が報道されることも多かった。そのため、新入生の職業知識にも誤りや偏りがあることが懸念された。

そこで、アンケートで新入生の知識量を調査し、生活指導や入門講義でそれを補う情報提供をしていきたいと考えた。

2 方法

2.1 調査協力者

2002年度から2011年度までの中部大学心理学科新入生で、協力者数は2002年度58名、2003年度93名、2004年度85名、2005年度94名、2006年度98名、2007年度95名、2008年度107名、2009年度98名、2010年度124名、2011年度72名の、計924名であった。

2.2 調査日

毎年度、新入生必須のゼミナール（旧フレッシュマンゼミA、現スタートアップセミナー）の4月の第1回講義日に実施した。

2.3 調査項目

フェイスシートでは、コンピュータの使用経験や携帯電話所有の有無、自宅でのインターネット接続の有無等、当該年度に参考としたい学生のIT環境についての質問項目を1～18項目用意し回答させたが、これらの項目の内容は毎年若干異なったため、今回の分析からは除外した。

1) 新入生の関心領域 「どんな心理学が学びたくて入学を決めましたか。名称か内容を簡単に書いてください。」という質問項目で、回答は複数可能の自由記述とした。

2) コンピュータに対する態度 コンピュータに対する興味、不安、学習意欲、有用感に関する28項目であった。ただし、項目1は2003年度までは「自分のコンピュータがほしい」であったが、新入生のノートPC所有が義務化されたため、2004年度からはこの項目を「自分のコンピュータが持ててうれしい」に変更した。加えて、項目23は2003年度までは「電話よりメールの方が好きだ。」であったが、所有したノートPCでメールを使うことが多くなったため、2004年度からはこの項目を「コンピュータでインターネットを活用できるようにになりたい。」という項目に変更した。

よって、本論文では10年間の比較を行うために、以上2項目を除いた計26項目を分析の対象とした。回答法は、「1. 全然そうではない」、「2. あまりそうではない」、「3. どちらとも言えない」、「4. ややそう」、「5. 非常にそう」の5件法であった。項目の詳細は結果と考察の表1を参照されたい。

3) 希望する進路 各種免許・資格の取得、大学院進学、一般企業就職、公務員希望等の12項目で、このうち項目11と項目12の教職に関する2項目は2004年度から追加されたものだが、8年間の比較のために分析の対象に含めた。回答法は「1. 考えていない」、「2. あまり考えていない」、「3. どちらとも言えない」、「4. やや考えている」、「5. 考えている」の5件法とした。項目の詳細は表3を参照されたい。

4) 職業知識 学生になじみのある臨床心理士、スクールカウンセラー、公務員等の専門職に関する知識を問う9項目で、「1. 全然知らない」、「2. あまり知らない」、「3. どちらとも言えない」、「4. 少し知っている」、「5. よく知っている」の5件法で回答させた。項目の詳細は表4を参照されたい。

以上の他、心理学以外の様々な学問領域への興味を尋ねる9項目が含まれていたが、あくまでも参考質問であったため本論文の分析では割愛した。

よって本論文で分析の対象としたのは、1)の自由記述1項目と、2)の26項目、3)の12項目、4)の9項目の、計48項目である。

2.4 手続き

全項目を冊子にした質問紙を配布し回答させた。回答に要した時間は約15分、調査の配布から回収までの時間は約20分であった。

3 結果と考察

3.1 新入生の関心領域

自由記述には様々な領域が記載されていたが、本学カリキュラムに含まれるものの中の上位9領域に絞り、何%の学生が関心を持って入学してきたのかについて、10年間の推移を調べた。すべてを同一のグラフに表すと見にくいため、3つの臨床系科目と6つの実験系科目に分けて2つのグラフに示した(図1、図2)。

図1を見るとわかるように、2002年度の新設の時点では臨床心理学とカウンセリングに関心のある新入生の比率が1位と2位で、図2の実験系のいずれの心理学領域よりも著しく高かった。しかし、図1の入学年度による推移を見ると、臨床心理学に関心のある入学生生の比率が徐々に低下するとともに、カウンセリングに関心のある入学生生の比率が急速に減少していることがわかる。後者については、カウンセリングに興味のある学生が減少したというよりもむしろ、カウンセリ



図1 臨床系の心理学領域への関心のあった新入生の10年間の比率の推移

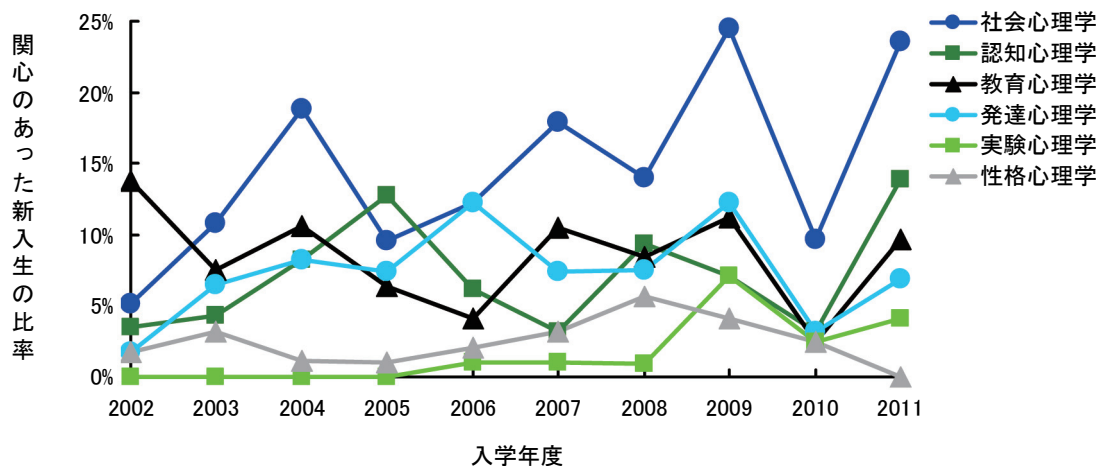


図2 実験系の心理学領域への関心のあった新入生の10年間の比較

ングが臨床心理学の一部であるという正しい認識が広まったためだと考えられる。したがって、両者を併せた臨床系に関心のある入学生比率は、かなり急速に減少したと見なすことができる。

一方、図2をみると、2002年度の時点では実験系の領域の中で教育心理学に関心のある入学生の比率が突出していたが、年々他の領域の比率も増加し、2011年度にはかなり多くの領域に分散したことがわかる。²⁾

特に、2009年度、2011年度の時点での社会心理学に関心のある入学生の比率はかなり高く、臨床心理学に関心のある学生の比率とほぼ等しくなっている。また、2011年度に認知心理学という一般にはなじみのない領域の心理学に関心のある入学生の比率が14%に達していたことも驚くべきことである。実際、2002年度の臨床系の3領域に関心のある入学生の合計比率は71%と非常に多かったのに対し、2011年度にはそれが32%に低下した。一方、実験系の領域に関心のある入学生の合計比率は2002年度の時点では6領域合わせてもたったの26%であったが、2011年度にはそれが58%にまで上昇していた。

臨床系と実験系の比率が年度でどう変化したかを調べるために、臨床系の3科目と実験系の6科目の10年間の比率を χ^2 検定したところ有意で ($\chi^2(9) = 46.94$,

$p < .01$)、比率は年度間で変化していた。そこで、Ryan法で各年度対の下位検定を行ったところ、2002年度と2008年度 ($\chi^2(1) = 10.33$, $p < .05$)、2009年度 ($\chi^2(1) = 17.28$, $p < .01$)、2011年度 ($\chi^2(1) = 23.03$, $p < .01$) の間、2010年度と2009年度 ($\chi^2(1) = 14.18$, $p < .01$)、2011年度 ($\chi^2(1) = 20.22$, $p < .01$) の間、2003年度と2009年度 ($\chi^2(1) = 14.20$, $p < .01$) の間、2005年度と2009年度 ($\chi^2(1) = 12.73$, $p < .01$) の間、2006年度と2009年度 ($\chi^2(1) = 12.63$, $p < .05$) の間に有意差が認められ、2007年度、2008年度前後を境として、実験系に関心のある入学生の比率が増大したことがわかった²⁾。

この結果は、新設当時の一時的な臨床心理学ブームがやや治まり、様々な領域に関心のある入学生が増え、偏りのない状態に近づいてきたことを示している。そしてこのことは、中部大学心理学科を、様々な領域の心理学を満遍なく教育する正統派の心理学科にしたことが適切であったことを示している。

3.2 コンピュータに対する態度

表1に、26個の質問項目と、10年間924名の評定平均値とSDを示す。これを見ると、コンピュータの有用性を示す項目の評定平均値が比較的高く、不安を示

表1 コンピュータに対する態度の質問項目と10年間924名の評定平均値とSD

番号	質問項目	平均	SD
2	コンピュータが使いこなせるかどうか不安だ	3.82	1.26
3	統計処理をさせるプログラムを作ってみたい	2.93	1.11
4	コンピュータを使った実験をやってみたい	3.49	1.09
5	コンピュータになんとなく親しみを感じている	3.11	1.22
6	コンピュータを使うと思うと不安な気持ちになる	2.76	1.32
7	コンピュータでのメールのやりとりに興味がある	3.09	1.20
8	パソコン画面をスライドのように呈示できるプレゼンテーションソフトの使い方を知りたい	3.31	1.13
9	コンピュータの知識があると就職に有利だと思う	4.62	0.68
10	コンピュータ音楽に興味がある	3.60	1.17
11	マルチメディアに興味がある	3.30	0.99
12	コンピュータを利用する機会ができるのが楽しみだ	3.67	1.10
13	コンピュータは様々なことに役に立つと思う	4.61	0.69
14	コンピュータの操作が楽しいとは思えない	2.54	1.14
15	インターネットに興味がある	4.21	0.87
16	コンピュータに興味がある	3.71	1.04
17	コンピュータ画像に興味がある	3.41	1.04
18	コンピュータを使った授業を受けたい	3.61	1.09
19	表に書き入れた数値を足したり引いたりできる表計算ソフトの使い方を知りたい	3.44	1.12
20	コンピュータを利用するのだと思うと緊張する	2.85	1.33
21	コンピュータを使いこなせるようになりたい	4.56	0.75
22	コンピュータで統計計算をするソフトの使い方を知りたい	3.63	1.11
24	コンピュータの使い方を知りたい	4.29	0.92
25	コンピュータで何ができるか知りたい	4.15	0.95
26	コンピュータで操作を失敗するのが怖い	3.46	1.39
27	実験を制御するようなプログラムを作ってみたい	3.27	1.02
28	コンピュータは将来役に立つと思う	4.72	0.55

す項目の評定平均値が比較的低い等、望ましい傾向が認められることがわかる。ただし、項目毎に年度間の違いを見ても全貌がわかりづらいため、項目のまとまりで尺度を構成し、尺度毎に年度間の比較を行うものとした。

924名のデータに主因子法、バリマックス回転の因子分析を施し、スクリープロットを参考に4因子を抽出した。そして、4つの尺度を構成し(表2)、尺度1を興味尺度($\alpha = .852$)、尺度2を不安尺度($\alpha = .849$)、尺度3を好奇尺度($\alpha = .830$)、尺度4を有用感尺度($\alpha = .764$)と命名した。

年度毎の各尺度の評定値の平均値、すなわち、下位尺度得点を図3に示す。各下位尺度得点に年度間で差があるか否かを調べるために、尺度毎に年度を参加者間要因とする1要因分散分析を行った結果、すべての尺度で年度の主効果が有意であった(尺度1から順に、 $F(9, 914) = 4.46; 2.90; 3.68; 2.95$; all $p < .01$)。どの年度間に差があるかをHSD検定した結果も、図3に示してある³⁾。

1. 興味尺度のグラフを見ると、2009年度の下位尺度得点と他のいくつかの年度の下位尺度得点に有意差があり、2009年度が最も低かったことがわかる。この原因を考えるために2009年度の入学生の他の尺度の下位尺度得点を見てみると、2009年度の入学生は、2. 不安尺度の下位尺度得点が最も高く、4. 有用感尺度の下位尺度得点が比較的高かった。これらを併せて考えると、この年度の入学生は、コンピュータは有用だと考えているものの、不安が高いため、興味が低減されてしまっていた可能性がある。

2009年度入学生は2011年度の現時点で3年次生である。その後の彼らの不安が低減し興味が増大したか否か、こうした傾向が成績等にどのような影響を及ぼしたかについては、慎重に追跡調査する必要がある。

2. 不安尺度のグラフを見ると、2010年度の入学生の不安が最も低く、2004、2006、2009年度の入学生より有意に低かった。

ただし不安は、低ければよいと言うものではない。根拠なく不安が低いのはすなわち楽観であり、事前知識が少なく考えが甘いという可能性も考えられる。実際、注2に記したように、2010年度の入学生は事前知識が少ない者が多いという特徴を有している。不安には古くから、学習を阻害するネガティブな側面もあるが、学習を促進するポジティブな側面もあることが知られている(Alpert & Haber, 1960; 杉浦, 1999)。実際、藤岡(1988)は、学習に関する有能感と学習動機の関連を調べ、有能感の高い者ほど学習を促進させるテスト不安が強いことを見いだし、その促進効果の存在を確認している。

この考え方を検証するために2010年度の入学生の他の尺度の分析結果を見てみると、2010年度の入学生の下位尺度得点は、1. 興味尺度、3. 好奇尺度、4. 有用感尺度のすべてで他のいくつかの年度の入学生の下位尺度得点より有意に低くなっている。特に4. 有用感尺度については、2010年度入学生以外はすべてほぼ等しく高いにもかかわらず、2010年度だけが逸脱して低い。

今後は、2010年度入学生、現時点での2年次生のこうした特性が、コンピュータを利用した講義や実習での学習態度や成績にどのような影響を及ぼしてきたかを、他の年度の入学生のそれと比較・検討する必要がある。

3. 好奇尺度のグラフからは、2002年度の入学生の下位尺度得点と他の多くの年度の入学生よりも高かったことがわかる。一般に、新設時に入学する学生は新設学科の情報をきちんと集めて受験するなど、やる気や向学心が高いと言われている。本研究結果はそれを裏づけているのかもしれない。

ただし、2011年度を含め、2002年度と有意差のなかった年度の入学生の下位尺度得点は、2002年度より著しく低かったわけではない。したがって、2011年度現在の入学生も、コンピュータに対してある程度高い好奇心を抱いていると考えられ、非常に望ましい。

4. 有用感尺度のグラフからは、先の2. 不安尺度のグラフ考察で述べたように、2010年度の入学生のみ、他の多くの年度の入学生よりもコンピュータの有用性を十分知らない様子がうかがえる。これは先述した通り、例年より大幅に多かった2010年度の入学生の心理学やコンピュータについての知識が他の年度の入学生よりも少ないことに起因していると考えられる。よって2010年度の入学生、現時点での2年次生にはコンピュータの用途や有用性についてより丁寧な解説をするとともに、コンピュータを利用する科目での学習態度や成績に十分注意を払っていく必要がある。

3.3 希望する進路

表3に、14個の質問項目と、10年間924名(項目13、14に関しては2004年度以降の8年間728名)の評定平均値とSDを示す。最も高いのは項目1の認定心理士の資格を取得したいという項目、2位が項目9の公務員、3位が項目12のスクールカウンセラーと続いている。3位のスクールカウンセラーについてはほとんどの場合、項目2の大学院入学と臨床心理士の資格取得が必要である。その項目2の評定平均値がスクールカウンセラーになりたいという項目12より下回っていることは、スクールカウンセラーに関する知識が不足していることを示唆しており、この点については、次項

表2 コンピュータに対する態度の評定値の因子分析結果

番号	質問項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	共通性
17	コンピュータ画像に興味がある	.678	-.170	.153	.130	.528
16	コンピュータに興味がある	.672	-.224	.210	.255	.611
12	コンピュータを利用する機会ができるのが楽しみだ	.631	-.175	.353	.247	.614
15	インターネットに興味がある	.554	-.072	.048	.379	.458
18	コンピュータを使った授業を受けたい	.538	-.245	.360	.250	.541
11	マルチメディアに興味がある	.518	-.119	.225	.135	.351
14	コンピュータの操作が楽しいとは思えない*	-.486	.478	-.142	-.115	.498
10	コンピュータ音楽に興味がある	.470	-.037	.073	.075	.233
7	コンピュータでのメールのやりとりに興味がある	.436	.092	.164	.161	.252
20	コンピュータを利用するのだと思うと緊張する	-.074	.829	.029	.019	.694
6	コンピュータを使うと思うと不安な気持ちになる	-.113	.807	-.026	-.003	.665
2	コンピュータが使いこなせるかどうか不安だ	-.169	.762	-.002	.132	.627
26	コンピュータで操作を失敗するのが怖い	-.044	.689	-.026	.108	.489
5	コンピュータになんとなく親しみを感じている*	.428	-.473	.154	.044	.432
19	表に書き入れた数値を足したり引いたりできる表計算ソフトの使い方を知りたい	.115	.009	.752	.200	.619
22	コンピュータで統計計算をするソフトの使い方を知りたい	.086	.017	.747	.216	.612
3	統計処理をさせるプログラムを作ってみたい	.251	-.034	.636	.011	.469
8	パソコン画面をスライドのように呈示できるプレゼンテーションソフトの使い方を知りたい	.217	.074	.523	.244	.385
4	コンピュータを使った実験をやってみたい	.415	-.234	.512	.147	.511
27	実験を制御するようなプログラムを作ってみたい	.338	-.130	.486	.081	.374
28	コンピュータは将来役に立つと思う	.129	-.050	.101	.683	.496
21	コンピュータを使いこなせるようになりたい	.191	.025	.224	.606	.454
24	コンピュータの使い方を知りたい	.112	.263	.216	.579	.463
9	コンピュータの知識があると就職に有利だと思う	.097	.078	.045	.516	.284
25	コンピュータで何ができるか知りたい	.265	.168	.224	.514	.413
13	コンピュータは様々なことに役に立つと思う	.198	-.127	.074	.485	.296
注) * 逆転項目		固有値	3.654	3.247	2.917	2.552
		寄与率	14.055	12.489	11.220	9.817

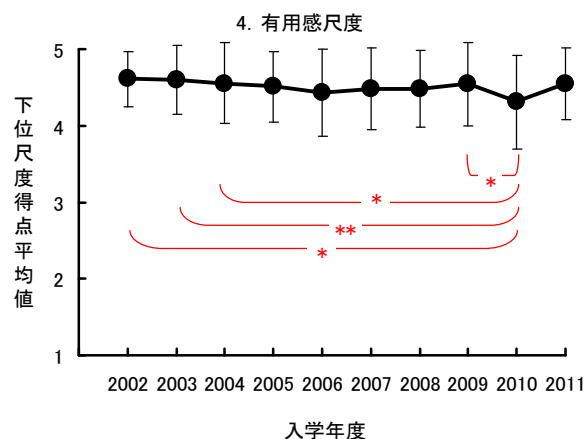
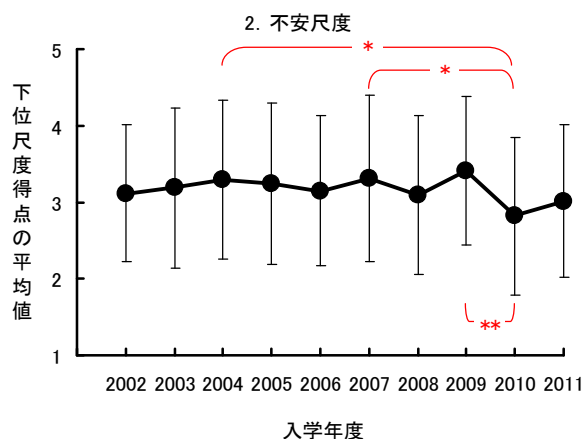
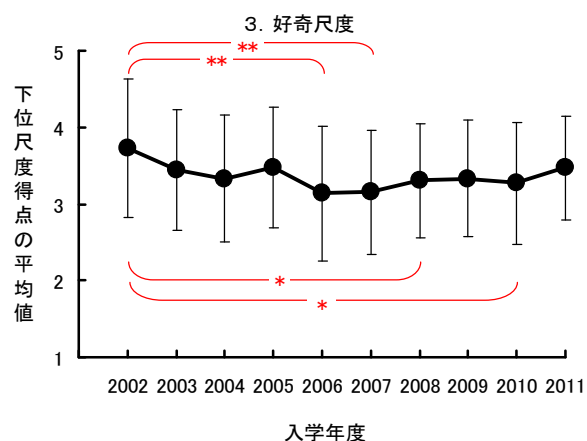
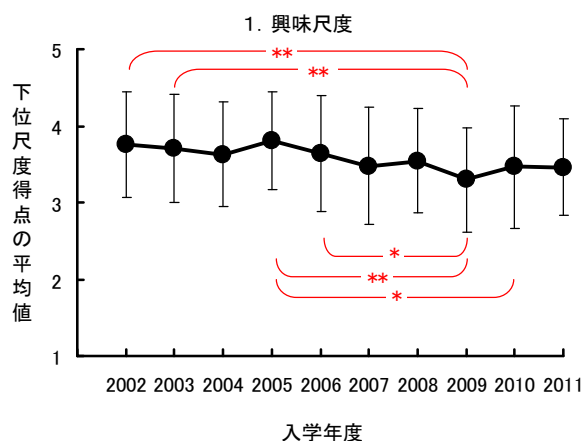


図3 各尺度の下位尺度得点の平均値の10年間の推移

(縦棒はSD、赤いコネクタで結んであるのがHSD検定で有意差のあった平均値；** $p < .01$ ，* $p < .05$)

表3 希望する進路の質問項目と10年間924名（13、14のみ8年間728名）の評定平均値とSD

番号	質問項目	平均	SD
1	学部卒業で取得可能な認定心理士を取得したいと考えていますか	4.33	0.94
2	大学院に入って、臨床心理士を目指したいと考えていますか	3.37	1.23
3	大学院に入って、学校心理士を目指したいと考えていますか	3.07	1.13
4	特に資格にはこだわらず、大学院に入って勉強したいと考えていますか	2.63	1.17
5	特に資格にはこだわらず、大学を卒業して就職したいと考えていますか	3.17	1.17
6	精神病院等の病院関係に就職したいと考えていますか	2.99	1.14
7	知的身体精神障害者等の福祉施設に就職したいと考えていますか	2.73	1.06
8	心身障害精神保健等の相談機関に就職したいと考えていますか	3.13	1.13
9	心理職の公務員になりたいと考えていますか	3.48	1.09
10	心理職以外でも公務員になりたいと考えていますか	3.10	1.17
11	一般企業に就職したいと考えていますか	3.11	1.10
12	スクールカウンセラーになりたいと考えていますか	3.44	1.16
13	教職の免許を取りたいと考えていますか *	2.86	1.32
14	教師になりたいと考えていますか *	2.50	1.23

注) *: 2004年度以降

の職業知識の分析で改めて確認する。それ以外の項目の評定平均値は、評定中央値の3.0から大きく逸脱しておらず、ほぼ中庸と見なすことができる。

各項目の10年間の変化を明らかにするために、項目毎に年度を参加者間要因とする1要因分散分析を行った。その結果、年度間に有意差が認められたのは、半数の7項目であった（項目1： $F(9, 912) = 5.29, p < .01$; 項目2： $3.51, p < .01$; 項目3： $3.14, p < .01$; 項目4： $1.54, ns$; 項目5： $4.72, p < .01$; 項目6： $1.14, ns$; 項目7： $1.20, ns$; 項目8： $1.15, ns$; 項目9： $2.48, p < .01$; 項目10： $0.92, ns$; 項目11： $4.75, p < .01$; 項目12： $1.36, ns$; 項目13： $F(7, 765) = 2.45, p < .05$; 項目14： $1.52, ns$ ）。そこで、有意差のあった項目の評定平均値のみグラフ化し（図4）、図3と同様、HSD下位検定結果を記入した⁴⁾。ただし、項目13は下位検定の結果有意に異なる平均対がなく2007年度にやや高かっただけだったため、グラフからは除外した。

図4からわかるように、1. 認定心理士の取得については、2002年度が顕著に高く、その後徐々に低下して2011年度に最低になっていた。これは、認定心理士の資格の有用性が感じられなくなったというよりもむしろ、認定心理士のように単位取得のみで取得できる資格よりも、認定心理士も資格取得の一部となっている心理学検定での1級資格の方が重んじられるようになってきたためである可能性がある。実際、心理学科でも、2010年度から心理学検定受検者は急激に増加し、57名もの受検者が受験し、半数が2級を取得した。この2級資格は、卒業とともに認定心理士の資格が得られると、1級資格に昇格する。今後は、心理学検定での1級資格の取得希望についても調査していく必要が

ある。

2. 大学院での臨床心理士の取得と3. 大学院での学校心理士の取得については、両方とも2002年度は最も高かったが、その後徐々に低下し、2011年度が最低となった。9. 心理職の公務員の希望については、これら2つほど顕著ではないものの、2002年度から2009年度にかけて緩やかに低下し、その後一定となっている。これらの結果は、以下の項目の分析結果と併せると、資格の取得や公務員になることを希望していないというよりもむしろ、最近の学生が大学院に進学せず大学卒業後すぐに一般企業に就職したいと考えていることを示している可能性が高い。

実際、5. 大学を卒業・就職希望については、2002年度から徐々に上昇し、2009年にピークに達して以来ほぼ一定である。また、11. 一般企業への就職についても、2002年度から著しく上昇し、2009年度でピークとなり、その後ほぼ一定である。

これらの結果は、最近の入学生が資格取得、大学院進学、公務員試験への合格等を目指さなくなり、卒業とともに一般企業に就職したいという極めて現実的な希望を抱いていることを端的に示している。

文系は理系と異なり、大学院を出て一般企業に就職することは極めて難しい。また、教育・研究職に至っては、国立大学の大学院修了者ですら就職が困難である現状では、就職できる可能性は極めて低い。こうした現状から判断して、この結果は、最近の入学生の向上心がなくなったことを示唆しているというよりもむしろ、現実を見極めた堅実な選択ができるようになったことを示していると考えられるべきなのかもしれない。

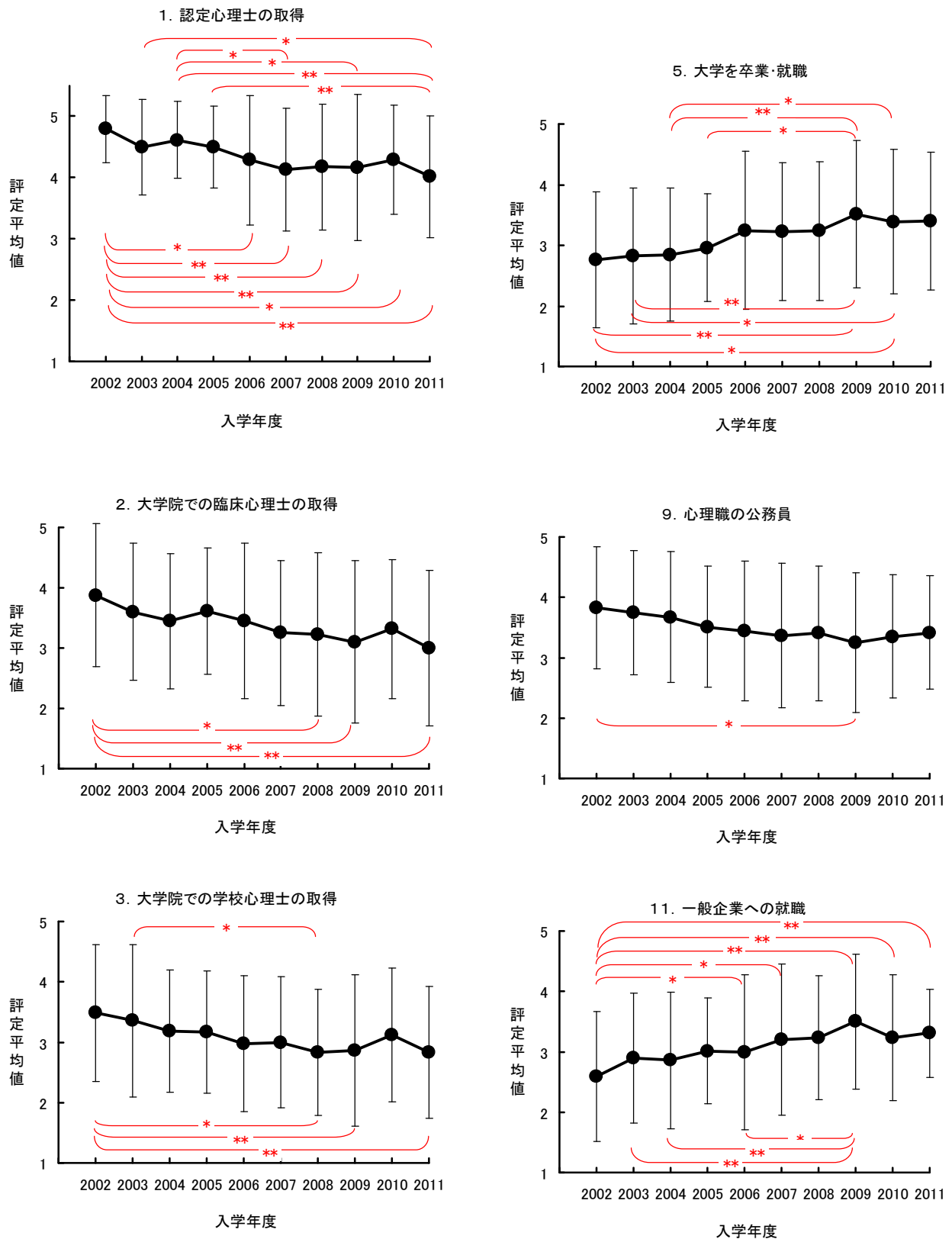


図4 年度間に有意差が認められた希望する進路の質問項目の評定平均値の10年間の推移
(縦棒はSD、赤いコネクタで結んであるのがHSD検定で有意差のあった平均値；** $p < .01$, * $p < .05$)

表 4 職業知識の質問項目と10年間924名の評定平均値とSD

番号	質問項目	平均	SD
1	臨床心理士の仕事がどのようなものか具体的に知っていますか	2.58	1.13
2	臨床心理士と精神科医の違いを知っていますか	2.26	1.16
3	臨床心理士の就職先にはどのようなものがあるかを具体的に知っていますか	2.37	1.13
4	臨床心理士のカウンセリング以外の業務に何があるか知っていますか	2.02	0.99
5	どのようなクライアントが対象となりうるかを知っていますか	2.36	1.13
6	精神病院等での臨床心理士の仕事の内容を知っていますか	2.19	1.07
7	スクールカウンセラーの仕事内容を具体的に知っていますか	2.69	1.19
8	スクールカウンセラーの身分や給与などを知っていますか	1.98	1.13
9	公務員の心理職にはどのようなものがあるか知っていますか	1.93	1.02

3.4 職業知識

9 個の質問項目の10年間924名の評定平均値とSDを表 4 に示す。これを見ると、すべての項目の評定平均値が中央値の3.0を下回っており、入学生の職業知識が全般的に極めて乏しいことがわかる。

次に、年度間で違いがあるかを見るために、前項と同様、項目毎に年度を参加者間要因とする 1 要因分散分析を行った。その結果、年度間に有意差が認められたのは、9 項目中 5 項目で（項目 1 : $F(9, 914) = 1.82, ns$; 項目 2 : $6.26, p < .01$; 項目 3 : $2.51, p < .01$; 項目 4 : $3.40, p < .01$; 項目 5 : $4.24, p < .01$; 項目 6 : $3.99, p < .01$; 項目 7 : $1.18, ns$; 項目 8 : $1.14, ns$; 項目 9 : $1.33, ns$ ）、有意差のあった項目の評定平均値のみグラフ化し（図 5）、図 4 と同様、HSD 下位検定結果を記入した⁵⁾。

図 5 を見るとわかるように、年度間に変動のあった 5 項目すべての平均評定値は、2002年度に最も高く、2006年度か2007年度がそれに続いて高い他は、極めて低かったことがわかる。

新設時の2002年前後は臨床ブームであったことと、先述したように、新設直後に入学する学生が新設学科の情報をきちんと集めてから受験する傾向にあることを考えれば、2002年度の知識がある程度高かったことは理解できる。一方、2006年度、2007年度前後に評定値が再度高まった原因は定かではないが、臨床心理士を扱ったテレビドラマが放映された等、マスコミの影響があった可能性が高い。なぜなら、年度間の変化が認められたのは9項目のうちの、臨床心理士に関する項目だけだったからである。この考え方が確かならば、臨床ブームの火付け役はマスコミで、彼らの知識はそれに基づいた浅薄なものだった可能性があるということになる。

実際、2002年度、2006年度、2007年度の評定平均値が高いとは言っても、それは中央値の3.0前後、つまり、「どちらともいえない」程度であり、入学生の職業知識はおしなべて非常に低かった。図 1 に示したよ

うに、2002年度当時はほぼ半数の入学生が臨床心理学を志していた。それにもかかわらず臨床心理士、スクールカウンセラー、公務員の心理職についての知識が中央値前後であったということは、こうした業種について自ら詳しい情報を調べることなく、単に臨床ブームにのったマスコミの情報をもとに進路を選択した可能性があることを示唆している。

最近では臨床ブームも収まり、偏った知識を持つ学生は少なくなった。事実、図 1 からわかるように、入学生の関心領域は最近では分散化してきた。そして、図 4 に示されているように、最近では一般企業への就職希望も高まった。今後は、臨床心理士や公務員の心理職だけでなく、一般職の公務員、警察官、企業内で登用される産業カウンセラーに関する情報や、調査・実験のノウハウとITや統計処理に関する基礎知識の企業内での活かし方等、職業に関する幅広い情報提供をしていく必要がある。

4 結論

4.1 まとめ

新入生の関心領域は、新設時の2002年度から2007年度、2008年度前後までは臨床ブームの影響で臨床系に偏っていた。しかしその後は実験系に分散し、2011年度現在は偏りが解消されていることがわかった。ただし、2010年度の入学生だけが一時的に2002年度の入学生に近い傾向を示した。これは、例年と比べて非常に多かった2010年度の入学生の中に心理学について十分な知識を持っていなかった学生が含まれていたためである可能性があると考えられた。

コンピュータに対する態度は、2002年度の入学生が他の年度の入学生に比べてややポジティブだったこと、2010年度の入学生が他の年度の入学生に比べてややネガティブであったことが明らかとなった。前者は、新設時の入学生が心理学科についての情報をよく調べ、十分な事前知識を持っていたためであり、後者は、先

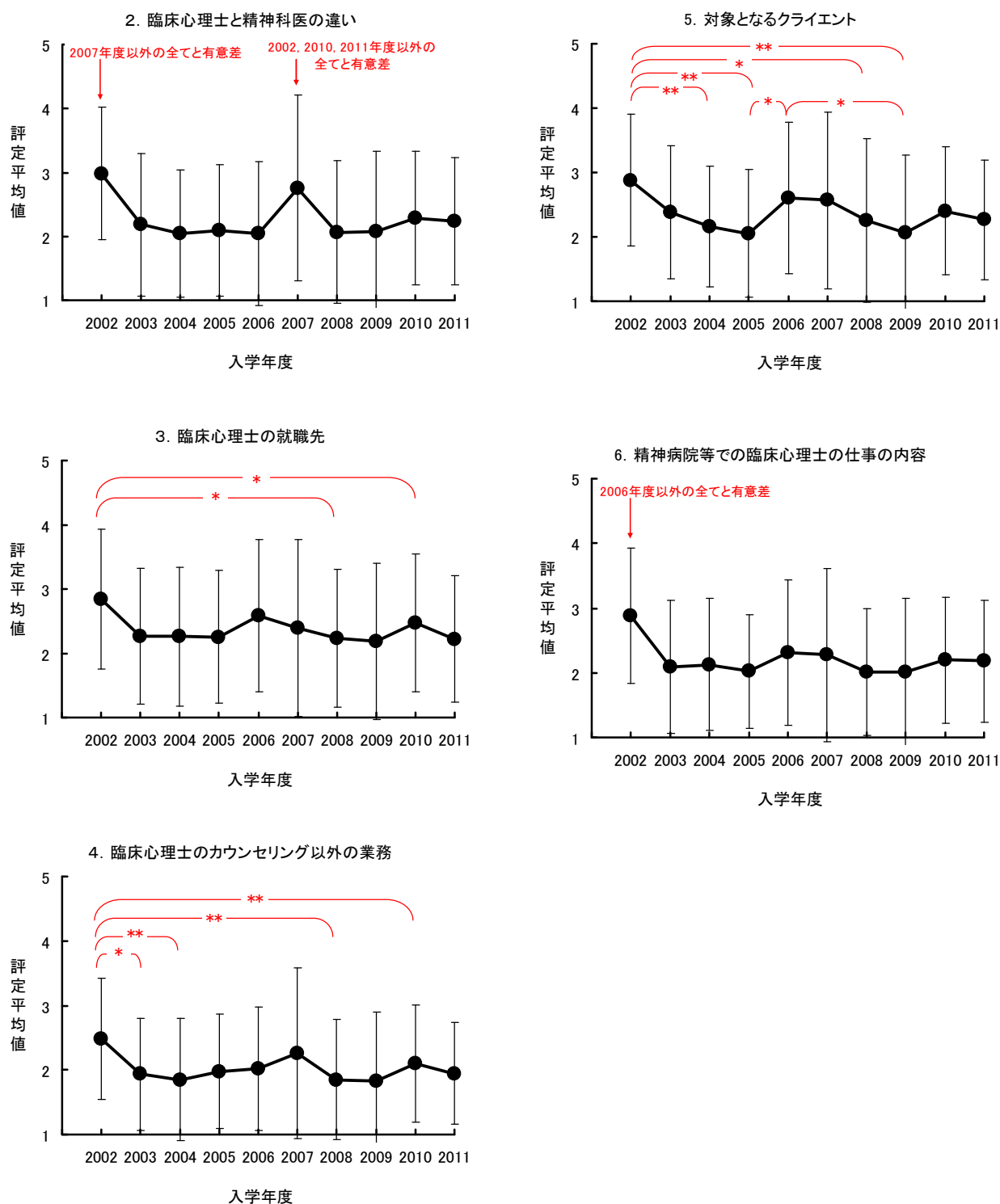


図5 年度間に有意差が認められた職業知識の質問項目の評価平均値の10年間の推移
(縦棒はSD、赤いコネクタで結んであるのがHSD検定で有意差のあった平均値；** $p < .01$, * $p < .05$)

と同様、例年と比べて非常に多かった入学生が他の年度の入学生とは若干異質であるためだと考えられた。

希望する進路については、各種資格の取得、大学院への進学、心理職の公務員としての就職等の希望が年々減少し、一般企業への就職希望者が増大していた。こ

れは、入学生の向上心の減衰というよりもむしろ、より現実的で堅実な選択ができるようになった結果ではないかと考えられる。

職業知識については、2002年度と2007年度前後に臨床心理学系の職業の知識が若干増えたものの、それで

も「どちらともいえない」という程度であり、全般的に著しく乏しいことがわかった。これは、職業、臨床心理士等に関する情報が主としてテレビドラマ等、マスコミから得られるもので、入学生自らが職業に関する情報を収集してきていないことを示唆していると考えられ、今後は専門職以外にも幅広い職種についての情報を提供していく必要があると結論された。

4.2 今後の課題

新入生の関心領域、コンピュータに対する態度については、2010年度入学生以外は問題はなかった。2010年度入学生、現時点の2年次生については、入学時の心理学やコンピュータに関する知識が少なかったことが示唆された。しかし、2010年度入学生も初年次教育で様々な領域の心理学の知識やコンピュータの有用性を知ったはずである。今後は、初年次教育を経て2010年度入学生の関心が他の年度の入学生と同様多様化し分散したか否か、各種コンピュータ教育を通じてコンピュータの有用性を認識し積極的にかかわる態度が形成されたか否かを追跡調査する必要がある。

希望する進路については、一般企業への就職を望む学生が増えたことは、確かに現実的で堅実な選択ができるようになったという点では望ましい。ただし、一般職に甘んずるだけでなく、臨床心理士や学校心理士、心理職の公務員、企業内での産業カウンセラー等の専門職、企業内で市場調査や実験、統計的検定等の専門知識を活かすことのできる職種を希望する学生も、もっと多くてもよいはずである。こうした専門職に就く希望が減ってしまった原因の1つは、やはり、今回明らかとなった職業知識の乏しさにある可能性がある。今後は、専門職を含めた幅広い職種や可能性についての情報を、3年次、4年次のキャリア教育を充実させていくなどして、これまで以上に十分提供していく必要がある。

注

1) このアンケートは、新入生の導入教育のための必修のセミナー（旧フレッシュマンゼミA、現スタートアップセミナー）の最初の講義に1回目を（質問紙調査）、半年後の最後の講義で2回目を（Web調査）実施し、両者を比較することで半年間の導入教育の効果を知る手がかりとしてきた。その一部は中部大学人文学部紀要に発表してきたので、ご関心の向きは水野（2003, 2004, 2005, 2006, 2008）、水野・松尾（2004）、水野・西口（2003）を参照されたい。

2) 2009年度と2011年度の入学生の傾向は類似してい

るが、2010年度の入学生の傾向は2002年度の入学生に近く、臨床心理学に関心が高い入学生が極めて高く、実験系の心理学への関心が著しく低く、2002年度より低くかつ偏ってしまっている。こうした傾向は、臨床心理学以外には、実験系の心理学の名称すら知らない入学生が多かったことを示唆している。この原因としては、2010年に通常よりも著しく多い128名もの入学生があったことが考えられる。例年だと入学してこないはずの数10名の入学生の心理学領域に関する知識は、例年の入学生より低かった可能性は高い。実際、この年度の学生のデータを除外すると、図2からは、一貫した分散傾向が見て取れる。

3) 図3のHSD検定での下位尺度得点の平均値の差の臨界値は2つの平均値の間にいくつ平均値が存在するかによって異なるため、グラフの見かけの差が検定結果と一致するとは限らない。各臨界値を文中に記入すると煩雑なため、有意だった箇所・有意水準のHSDの差の臨界値を以下の表に示す。

平均対(年度)	臨界値	p	平均対(年度)	臨界値	p
興味尺度			好奇尺度		
2002-2009	0.440	.01	2002-2006	0.495	.01
2003-2009	0.385	.01	2002-2007	0.498	.01
2005-2009	0.384	.01	2002-2008	0.419	.05
2005-2010	0.313	.05	2002-2010	0.409	.05
2006-2009	0.327	.05	有用感尺度		
不安尺度			2003-2010	0.266	.01
2009-2010	0.518	.01	2002-2010	0.265	.05
2004-2010	0.464	.05	2004-2010	0.235	.05
2007-2010	0.450	.05	2009-2010	0.226	.05

4) 注3と同じく、図4のHSD検定の平均値の差の臨界値を以下の表に示す。

平均対(年度)	臨界値	p	平均対(年度)	臨界値	p
1. 認定心理士の取得			5. 大学を卒業・就職		
2002-2006	0.497	.05	2002-2009	0.714	.01
2002-2007	0.581	.01	2002-2010	0.590	.05
2002-2008	0.568	.01	2003-2009	0.624	.01
2002-2009	0.577	.01	2003-2010	0.508	.05
2002-2010	0.477	.05	2004-2009	0.638	.01
2002-2011	0.615	.01	2004-2010	0.522	.05
2003-2011	0.471	.05	2005-2009	0.535	.05
2004-2007	0.448	.05	9. 心理職の公務員		
2004-2009	0.444	.05	2002-2009	0.581	.05
2004-2011	0.558	.01	11. 一般企業への就職		
2005-2011	0.470	.05	2002-2007	0.581	.05
2. 大学院での臨床心理士の取得			2002-2008	0.569	.05
2002-2008	0.643	.05	2002-2009	0.672	.01
2002-2009	0.759	.01	2002-2010	0.645	.01
2002-2011	0.808	.01	2002-2011	0.715	.01
3. 大学院での学校心理士の取得			2003-2009	0.587	.01
2002-2008	0.591	.05	2004-2009	0.601	.01
2002-2009	0.601	.05	2006-2009	0.498	.05
2002-2011	0.640	.05			
2003-2008	0.514	.05			

5) 注3、注4と同じく、図5のHSD検定の平均値の差の臨界値を以下の表に示す。

平均対(年度) 臨界値 p	平均対(年度) 臨界値 p
2. 臨床心理士と精神科医の違い	4. 臨床心理士のカウンセリング以外の業務
2002-2003 0.712 .01	2002-2003 0.529 .05
2002-2004 0.725 .01	2002-2004 0.626 .01
2002-2005 0.710 .01	2002-2008 0.599 .01
2002-2006 0.705 .01	2002-2009 0.609 .01
2002-2008 0.694 .01	5. 対象となるクライアント
2002-2009 0.705 .01	2002-2004 0.714 .01
2002-2010 0.677 .01	2002-2005 0.700 .01
2002-2011 0.646 .05	2002-2008 0.588 .05
2003-2007 0.534 .05	2002-2009 0.695 .01
2004-2007 0.635 .01	2005-2006 0.521 .05
2005-2007 0.619 .01	2006-2009 0.515 .05
2006-2007 0.613 .01	6. 精神病院
2007-2008 0.600 .01	2002-2003 0.665 .01
2007-2009 0.613 .01	2002-2004 0.677 .01
3. 臨床心理士の就職先	2002-2005 0.663 .01
2002-2008 0.595 .05	2002-2007 0.570 .05
2002-2009 0.605 .05	2002-2008 0.648 .01
	2002-2009 0.658 .01
	2002-2010 0.632 .01
	2002-2011 0.603 .05

引用文献

- Alpert, R., & Haber, R. N. (1960). Anxiety in academic achievement situations. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **61**, 207-215.
- 藤岡秀樹 (1988). 学習動機についての研究 岩手大学教育学部附属教育学センター教育工学研究, **10**, 43-54.

- 水野りか (2003). 文科系の大学1年生のコンピュータの利用経験と興味・不安に関する調査報告 中部大学人文学部研究論集, **9**, 159-173.
- 水野りか (2004). 心理学科1年生の進路希望と進路知識—2002年度と2003年度の入学生の比較— 中部大学人文学部研究論集, **11**, 1-14.
- 水野りか (2005). 心理学科新入生の興味関心・進路希望・進路知識の縦断比較 中部大学人文学部研究論集, **13**, 1-16.
- 水野りか (2005). 心理学科新入生のコンピュータ・レディネスの縦断比較 中部大学人文学部研究論集, **13**, 17-34.
- 水野りか (2006). 2005年度の心理学科入学生の興味関心と進路希望・知識 中部大学人文学部研究論集, **15**, 27-42.
- 水野りか (2008). 心理学科新入生の興味・関心と進路希望・知識の推移—過去2年間と開設年度との比較— 中部大学人文学部研究論集, **19**, 67-83.
- 水野りか・松尾崇史 (2004). 心理学科入学生のコンピュータ利用のレディネス—2002年度と2003年度の比較— 中部大学人文学部研究論集, **11**, 15-29.
- 水野りか・西口利文 (2003). 心理学科1年生の進路希望と進路知識のずれ—問題点の把握と進路指導の指針— 中部大学人文学部研究論集, **9**, 175-208.
- 杉浦義典 (1999). 心配の問題解決志向性と制御困難性の関連 教育心理学研究, **47**, 191-198.

(教授 人文学部 心理学科)